商学論集　第61巻第3号　1992年11月

【研究ノート】

永訣の朝

――心象スケッチ『春と修羅』ノート（下）

神子博昭

妹の死

一九二一（大正十）年、国柱会をたよって上京した宮沢賢治は、東京でデカダンスすれすれのところまで行く。「感情があまり冬のやうな工合になってしまっ」たから、というわけで目をつぶるようにして肉食をしたことを、同年八月、関徳彌あての手紙に書いている。このときの宮沢賢治の境位は、志をとげるまでは身を慎もうと決意して上京した青年が、思うにまかせずついに身をもちくずしてしまう、というのとなんらかわりない。彼にとり肉食は女を知ることと等価である、罪障の意識からすればそうだ。しかし他面において、事実としてはそこまでおちなかったという奇妙にあいまいな部分を心の奥にのこしたのではないだろうか。妹との関係のなかで問題になってくるのは、このあいまいな部分である。

もしかりに、とわたしは想像するのだが、このとき宮沢賢治が女を知り、童貞を失っていたとしたら、どうだろう？　彼と妹との関係は、無垢（聖性）――汚れ（俗性）という対極構造をとり、彼の無垢願望はあるいは相対化の契機をつかみえたかもしれない。死んだ妹は聖化される一方、あとにのこった彼は生活へと、関係性へともういちどもどって行けたかもしれない。万にひとつであろうと、可能性だけはあったのだ。しかし実際はそうならなかった。彼は妹との関係を無垢と修羅のことばでとらえる。しかしこれは対極をなす概念ではない。彼は〈修羅〉でありながら、同時に自らの〈無垢〉の可能性を否定しないのである。

妹〈とし子〉は宮沢賢治の無垢願望の投影像であった。〈とし子〉との関係においてのみ彼は無垢でありえた。その他のひととの関係にあっては彼は修羅としてあらわれる。これは人間として関係を結ぶのを拒むにひとしい。

だが〈とし子〉との関係においても、自己願望の投影であるかぎり、それが非―関係であることを問われずにはいられない。〈とし子〉はついに妹トシではないのである。この事実が臨終の場面で宮沢賢治を、ふいうちのようにおそう。〈とし子〉像を彼の心にのこしたままで、トシはひとり死んで行く。そしてトシの死とともに彼の死はおとずれてく

一

れない。死にひきさらわれていくトシと、生の側にとりのこされる彼とのあいだには、どうしてもこえがたい一線がある――このだれでもが口にする陳腐きまわりないように思える事実を、彼は骨身にてっして知らされただろう。しかし三篇の詩において自己劇化する意志の強さで、彼はともかくも十一月の妹の死の場面を耐えしのぐ。

三篇の詩において彼はどのようにおのれを劇化しているだろう？そう問うことは、了解しがたい妹の死にたいし、彼がどうふるまったかを問うことである。

まづは妹の死は、妹自身の個別的な死であることを認めてやることである。これは逆からいえば彼のえがいた〈とし子〉像は、ついに自己の無垢願望の投影でしかないことを是認することである。こうしてはじめて無垢願望は相対化のきっかけをうるだろう。しかしこれはついに彼のなしえないことであった。

『永訣の朝』は妹の死を了解しがたく思いながらも、ともかくもその死を見とろうとしている。しかし了解しがたさをいっきにとびこえようとして、彼は感謝と祈りの念そのものにまでころうとする。妹トシと〈とし子〉像との差異は自覚されないままである。

つぎにくるのは妹が兄に、いっしょに死んでほしいと乞う場面を想定することだ。これは兄の抱く〈とし子〉像を、妹が自分をすててその像に同化することによりすくってほしいと願うことである。

ああけふのうちにとほくへさらうとするいもうとよ
ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか
わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ
泣いてわたくしにさう言つてくれ

二

（『松の針』）

しかしこれは倒錯である。それに気づいて〈わたくし〉はふと口をつぐみ、「おまへ」に見入る。「おまへの頬の　けれども／なんといふけふのうつくしさよ」――この感嘆は「おまへ」への無限の距離を暗示する。

妹がひとりで死んで行くことが、彼にはどうしても認めがたい。これはトシの死をまえに内心の〈とし子〉像にあくまでも執心することである。このふるまいは無垢への我執という矛盾であり、修羅はここにきわまる。妹にたいしてすら〈わたくし〉は修羅としてあらわれる。

無声慟哭

こんなにみんなにみまもられながら
おまへはまだここでくるしまなければならないか
ああ巨きな信のちからからことさらにはなれ
また純粋やちいさな徳性のかずをうしなひ
わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき
おまへはじぶんにさだめられたみちを
ひとりさびしく往かうとするか
信仰を一つにするたつたひとりのみちづれのわたくしが
あかるくつめたい精進（じやうしん）のみちからかなしくつかれてゐて
毒草や蛍光菌のくらい野原をただよふとき
おまへはひとりどこへ行かうとするのだ
（おら　おかないふうしてらべ）
何といふあきらめたやうな悲痛なわらひやうをしながら

またわたくしのどんなちいさな表情も
けつして見逃さないやうにしながら
おまへはけなげに母に訊くのだ
（うんにや　ずいぶん立派だぢやい
　けふはほんとに立派だぢやい）
ほんたうにさうだ
髪だつていつさうくろいし
まるでこどもの苹果の頬だ
どうかきれいな頬をして
あたらしく天にうまれてくれ
《それでもからだくさえがべ？》
《うんにや　いつかう》
ほんたうにそんなことはない
かへつてここはなつののはらの
ちいさな白い花の匂でいつぱいだから
ただわたくしはそれをいま言へないのだ
（わたくしは修羅をあるいてゐるのだから）
わたくしのかなしさうな眼をしてゐるのは
わたくしのふたつのこころをみつめてゐるためだ
ああそんなに
かなしく眼をそらしてはいけない

妹の死をまえにして宮沢賢治の修羅の闇がどれほど深く、黒々としていたかをおそろしいほどの迫真力をもってえぐりだすのは菅谷規矩雄である。

校本全集の年譜によれば十一月二十七日トシ逝去。翌々日二十九日、葬儀が行なわれた。「賢治は宗旨がちがうために出ず、柩を火葬場へ送り出すとき、町角からあらわれて人びとと供に柩に手をかけて運んだ。……安浄寺の僧侶がかんたんな回向をしたあと、賢治は棺の焼き終わるまでりんりんと法華経をよみつづけ、そこにいた人びとにおそろしいような、ふるえるような感動を与えた。遺骨は二つに分けるといい、自分の持ってきた丸い小さな罐に入れた」――二階自分の部屋の仏壇に安置したのである。この記述をうけて菅谷はいう。

――この場面をおもうと、なにか鬼気せまるようなものがある。分骨ということじたい決して異例ではない、と打ちけそうとしてみてもだめである。宮沢のものすごさに、わたしなどは血の気がひきそうになる。このときいちどだけ、宮沢は決して人まえにはさらしたことのないおのれの「修羅」を、「修羅」たるおのれを、あからさまにおもてにだしたのだ。……なぜそれほどまでに〈妹〉の遺骨を、つまり霊を、欲したのだったか、ひつようとしたのだったか。

そう問うて菅谷は、これはトシの霊を、父母の〈子〉としてのトシと、彼自身の〈妹〉としてのトシとにひきさいたことだ、そうでないなら、トシの霊を〈子〉と〈妹〉に二重化したのだと指摘する。そしてさらに問う。

しかもそうだとすればなおのこと、〈子〉でもない〈妹〉でもないトシ――トシじしんにとってのトシ、一個の独立した人格としてのトシは、どこへいってしまうのだろう。

三

いったいこのようにしてまでおのれの手元にひきとどめておきたかった、〈仮構〉としての「とし子」とはだれか。

それは〈人格〉としての宮沢トシの現実性をあたうかぎり無化し、〈子〉としての（宮沢家の長女としての）地上性をすべて超越し、ただただ〈妹〉としてのみ存在する幻想、すなわち宮沢がいだいていた「対なる幻想」、はたまた「対なる幻想」としての宮沢じしんの、ひとつの本質である。

〈わたくし〉は修羅をあるいているから、死に行く妹にことばをかけられないという。たしかに、そうだ。〈わたくし〉は妹に比して、食の悪しき円環にとらわれ、性の魅惑とおびえにおそわれ、たじろぐ。しかしこの詩の明かす修羅はそれにとどまらない。ここでの〈わたくし〉はどうしようもない不当な思いに駆られ、妹の死を了解しようとせず、死に行く妹に暗く心をとざしているのである。これこそ修羅におちることでなくてなんだろう。ひとり死んで行く妹をまえに、〈わたくし〉は自分「じしんの、ひとつの本質」である無垢に固執する。しかしこれは矛盾である。固執されればすでに無垢は無垢でなくなる。これがどれほど理不尽な態度であるか、〈わたくし〉は十分すぎるほど自覚している。しかし自覚はますます〈わたくし〉をうちすてられたものとしてあらわすだけなのだ。妹はそうした兄を見ているだろう。

またわたくしのどんなちいさな表情も
けつして見逃さないやうにしながら
おまへはけなげに母に訊くのだ

「あたしこわいふうをしてるでせう」「いいえ、立派ですよ」「それでもわるいにほひでせう」「いいえ、ちつとも」――死に行くものを死に行くままに逝かせようとする母の心づかいをかたわらに、〈わたくし〉は無言でうつむき、こぶしをひざににぎりしめるしかないのだ。『無声慟哭』が劇化してみせたのは、そうした宮沢賢治の姿であった。「ああそんなに／かなしく眼をそらしてはいけない」――だが〈わたくし〉の修羅をまえにして、どうして妹は眼をそらさずにいられよう？

さて臨終詩篇三篇の自己劇化を手がかりに、宮沢賢治が妹トシの死にさいしてどうふるまったかをたどってみた。臨終の詩篇としては書かれなかったが、考えられるふるまい方にはもうひとつある。

それは妹のために死ぬことである。『松の針』の自己劇化にうかがえるのは、妹が自分を否定して彼の〈とし子〉像に同化してほしいという願望であった。しかしここではむしろ、なにもかもすてておのれの存在そのものを否定してしまうことである。これは殉死だ。しかし、なにに殉じるか？　妹トシの存在にか？　そうではあるまい。結局は〈とし子〉像は相対化されず、手をふれられぬままのこるのではないか？

野辺の送り

たったひとりで生きて行く、そう宮沢賢治が決意したとき、そこにはひとつの限定があった、妹が死ぬまでは、と。これがわたしの想定であった。そして妹の実際の死は、この決意のきわどさをついたのである。妹はひとりで死んで行く、彼はひとりでこちらにのこる。このどうにも了解できない不合理に強いられて、彼は妹を手元にひきとめ

ておくことに固執する。なぜか？　妹にこそ彼の無垢の可能性がかかっていたからだ。

『無声慟哭』の日付は一九二二（大正十一）年十一月二十七日――『青森挽歌』は一九二三（大正十二）年八月一日。その間『風林』『白い鳥』の二篇をかぞえるのみである。この二篇は一九二三年六月になってやっと書かれたものであり、しかも臨終詩篇のモチーフのはげしさはもとむべくもない。彼は完全にことばを失っている。どうしてか？　臨終の場面で思いはとまっており、〈とし子〉はまだ死んでいないからだ。妹はまだひきとめられている。これがおよそ八か月にわたる無言の意味である。

だが妹には妹の道を歩ませてやるべきではないか？　彼はここにとどまり、妹の死出の旅を見とどけるべきではないか？　一九二三年七月末から八月にかけて宮沢賢治は津軽、宗谷の両海峡をわたり樺太旅行にでかける。このオホーツク行はしたがって妹の野辺の送りである。

『オホーツク挽歌』という名のもとにあつめられた詩篇はスケッチ集では五篇になるが、問題となるのは長詩『青森挽歌』一篇のみである。この詩は夜汽車のなかで〈わたくし〉が、夢うつつの回想や幻想をとおして、この世界から「つぎのせかい」にはいって行く妹の姿を見とどける、という結構をとっている。

〈わたくし〉は青森行きという一定の方向性をもった夜汽車のなかにすわっている。そしてこの汽車が「銀河系の玲瓏（れいろう）レンズ／巨きな水素のりんごのなか」をかけはじめ、方向性を失って行くところから場面ははじまる。

こんなやみよののはらのなかをゆくときは
客車のまどはみんな水族館の窓になる
（乾いたでんしんばしらの列が
せはしく遷ってゐるらしい
きしやは銀河系の玲瓏（れいろう）レンズ
巨きな水素のりんごのなかをかけてゐる）
りんごのなかをはしってゐる
けれどもここはいったいどこの停車場（ば）だ
（中略）
わたくしの汽車は北へ走ってゐるはづなのに
ここではみなみへかけてゐる
焼杭の柵はあちこち倒れ
はるかに黄いろの地平線
それはビーアの澱（おり）をよどませ
あやしいよるの　陽炎と
さびしい心意の明滅にまぎれ
水いろ川の水いろ駅
（おそろしいあの水いろの空虚なのだ）

「水いろの空虚」のなかで〈わたくし〉の思いは行きくれる。この方向性の喪失感が妹の姿をよびおこす。あいつも行きくれているのだろうか、と。

あいつはこんなさびしい停車場を
たったひとりで通っていったらうか
どこへ行くともわからないその方向を

五

どの種類の世界へはいるともしれないそのみちを
たつたひとりでさびしくあるいて行つたらうか

〈わたくし〉も〈とし子〉も行きなやんでいるのは、じつは臨終の場面で時間がとまってしまっているからだ。〈わたくし〉は妹の死をうけいれようとしなかった。妹をひきとめた。ひきとめた（固執した）ということが、こんどは罪障となって妹を畜生道へ、餓鬼道へ地獄へとおとすのではないかという不安に駆られ、ますます〈わたくし〉は妹を死なせてやれない。

とし子はみんなが死ぬとなづける
そのやり方を通つて行き
それからさきどこへ行つたかわからない
それはおれたちの空間の方位ではかられない
感ぜられない方向を感じやうとするときは
たれだつてみんなぐるぐるする

ひとは死んだらどこへ行くか、という問いは法華経（仏教）の内部にいるものには自明な問いであるが、近代詩の側からすれば特異である。そこでは人間は人間として死に、やはり人間（死者）として心理的遠近のちがいはあるが生者のもとにとどまる。

智恵子はすでに元素にかへつた。
わたくしは心霊獨存の理を信じない。
智恵子はしかも實存する。
智恵子はわたくしの肉に居る。
智恵子はわたくしに密着し、
わたくしの細胞に燐火を燃やし、
わたくしと戯れ、
わたくしをたたき、
わたくしを老いぼれの餌食にさせない。

（『元素智恵子』）

高村光太郎にあっては智恵子は理念化されてはいるが、人間であることにはかわらない。死んだら智恵子はどこに行くか、とは高村には問いようのないことである。

宮沢賢治にあっては人間という概念がカテゴリーとして成りたたず、人間は容易に無垢なる小動物に、また邪悪なけだものに変身する。この変身にはしかし、見えざる死がかくされている。人間はおちて（死んで）、小動物やけだものになるのだ。こうした生きものの世界の見方の背景にあるのは、いうまでもなく仏教の転生観である。つまり生きものの連鎖と相互変身の可能性とは、転生という時間性を空間化したものである。こうした「生命の思想」に生きている宮沢賢治にとっては、だから、人間は死ねば必然的にどこかへ行く、とはつまりなにかに生まれかわるのである。したがってなにに転生するか（死んでどこへ行くか）は必死の問いとならざるをえない。

しかし、その問いをめぐって不安があるからというわけで〈とし子〉をいつまでもひきとめておくわけにはいかないのだ。妹の死のあとに生きのこってしまったものとしては、どのような形であれ、生き恥をさらす決意をかためなければならないだろう。それが生きのこるとい

六

うものだ。妹を臨終の床から柩におさめ、野辺の送りをして、死出の旅に旅だたせてやらねばならない。オホーツク行はいい潮時であった。別れの場面は早晩おとずれぬわけにはいかなかったのである。

こうして〈わたくし〉はもういちど、妹の死に立会う。〈わたくし〉の思いがひきよせられて行くのは〈とし子〉の死の直後、いわば生と死の中間領域である。どうしてだろう？

妹は耳がきこえなくなり、呼吸がとまり脈がうたなくなり、ついに目が見えなくなっても、〈わたくし〉がその耳もとで「そらや愛やりんごや風　すべての勢力のたのしい根源／万象回帰のそのいみじい生物の名を」ちからいっぱいさけんだとき、「二へんうなづくやうに息をした」――〈わたくし〉が思いかえし、とりすがるのはここである。ほんとうにうなづいたのか？　「けれどもたしかにうなづいた」さらにもういちど、自分にいいきかす――

たしかにあのときはうなづいたのだ
そしてあんなにつぎのあさまで
胸がほとってゐたくらゐだから
わたくしたちが死んだといつて泣いたあと
とし子はまだまだこの世かいのからだを感じ
ねつやいたみをはなれたほのかなねむりのなかで
ここでみるやうなゆめをみてゐたかもしれない
そしてわたくしはそれらのしづかな夢幻が
つぎのせかいへつゞくため
明るいいゝ匂のするものだつたことを
どんなにねがふかわからない

ほんたうにその夢の中のひとくさりは
　かん護とかなしみとにつかれて睡ってゐた
おしげ子たちのあけがたのなかに
ぼんやりとしてはいってきた
《黄色な花こ　おらもとるべがな》

〈とし子〉は死んでも生きている――この微妙な位相を仮構することが〈わたくし〉にはどうしてもひつようなのだ。逆からいえば、この位相を仮構しえて、はじめて長篇『青森挽歌』は中心のモチーフに到達したのである。

まわりに見とっているだれの目にも〈とし子〉は死んだと思われた。そのとき〈わたくし〉は「いみじい生物の名」（如来のことか？）を耳もとでちからいっぱいさけんでみた。するとまさに〈わたくし〉にこたえて〈とし子〉はうなづいた。――この死んでも生きているという位相において確認しようとするのは、〈わたくし〉の信仰にひびきかえす〈とし子〉の信仰である。なぜなら信仰こそ〈とし子〉を天へと、もうひとつの生へとおくりとどけてくれるはずだから。――たしかに、そうだ。この場面をそう解釈するのは、まちがいではない。だがここで〈わたくし〉が確認しようとするのは、むしろふたりの心が通じあったということだろう。臨終の場面において不可能であったコミュニケーションが、いまここでやっと成立したのである。正確にいえば、八か月ののち、はじめてこの場面のもつ意味がわかってきたのである。これは死との和解のしるしである。そのため〈とし子〉の夢幻は「つぎのせかい」につづくことができる。「つぎのせかい」という方向性をもったことばのうちに、〈わたくし〉のあるのりこえが感じとれる。ようや

七

く〈とし子〉も死ぬことができる。「ねつやいたみをはなれ」しずかに歩みだすことができるのだ。『永訣の朝』のつきつめたような「ねがひ」とは異なり、ここでの「ねがひ」は固く結んでいたものを解くような「ねがひ」である。〈わたくし〉は固執と不安を解く。

あいつは死んでどうなったろう？――これをくりかえし宮沢賢治は問うたことだろう。そして妹のたどる道すじを思いえがいてみようとしたことだろう。しかしその死を認めまいとするかぎり、これはうまく行かなかった。ここではじめて、妹の死と和解できてはじめて、それが可能となるのである。「どうしてわたくしはさうなのをさうと思はないのだらう」――ようやくにして〈わたくし〉は、〈とし子〉を「つぎのせかい」に旅だたせることができる。その向うところが天であるか、地獄であるかは、じつはたいした問題ではない。肝心なのは〈とし子〉が、生と死の中間状態のなかで〈わたくし〉とコミュニケーションをむすび、そしてはなれて行ったということだ。〈わたくし〉は妹と心を通じ、そして妹を喪失したのである。しかし特異なリズムとイメージにみちた天上行の一節をここにひいておこう。

それらひとのせかいのゆめはうすれ
あかつきの薔薇いろをそらにかんじ
あたらしくさはやかな感官をかんじ
日光のなかのけむりのやうな羅（うすもの）をかんじ
かがやいてほのかにわらひながら
はなやかな雲やつめたいにほひのあひだを
交錯するひかりの棒を過ぎり
われらが上方とよぶその不可思議な方向へ
それがそのやうであることにおどろきながら
大循環の風よりもさはやかにのぼつて行つた
わたくしはその跡をさへたづねることができる
そこに碧い寂かな湖水の面をのぞみ
あまりにもそのたひらかさとかがやきと
未知な全反射の方法と
さめざめとひかりゆすれる樹の列を
ただしくうつすことをあやしみ
やがてはそれがおのづから研かれた
天のる璃の地面と知つてこゝろわなき
紐になつてながれるそらの楽音
また瓔珞やあやしいうすものをつけ
移らずしかもしづかにゆききする
巨きなすあしの生物たち
遠いほのかな記憶のなかの花のかほり
それらのなかにしづかに立つたらうか

これにすぐつづいて地獄行の一節がやってくるが、天上、地獄ふたつの幻想の方向のちがいは、それ自体さして重要ではない。それは妹を逝かせた（失った）ということの結果でしかない。だからこれらの幻想には〈わたくし〉はそれ以上たちいるまいとする。

けれどもとし子の死んだことならば
いまわたくしがそれを夢でないと考へて
あたらしくぎくつとしなければならないほどの

八

あんまりひどいげんじつなのだ
感ずることのあまり新鮮にすぎるとき
それをがいねん化することは
きちがひにならないための
生物体の一つの自衛作用だけれども
いつでもまもつてばかりゐてはいけない
ほんたうにあいつはここの感官をうしなつたのち
あらたにどんなからだを得
どんな感官をかんじただらう
なんべんこれをかんがへたことか
むかしからの多数の実験から
倶舎がさつきのやうに云ふのだ
二度とこれをくり返してはいけない

〈とし子〉がいなくなったことは、たしかに「あんまりひどいげんじつ」ではあるが、いまは「新鮮にすぎる」ほどその喪失を感じていなければならない。小乗仏教の一派である倶舎宗が「さつきのやうに」いう、その「さつき」とはなんであるか、文脈からはどうもはっきりしない。しかしここでは天上、地獄いづれにしても、幻想にたいしてある抑制をはたらかせているのはたしかである。そしてこの抑制のうちに、ともかくも妹を旅だたせてやれたという安どの思いが感じられる。

長篇『青森挽歌』もひとつの地点に達したかと思われる。だがもういちどゆりもどしがやってくる。意地悪くつぶやく声があるのだ。――ここのところはかなり読みとりにくい。ひとまづ長篇の最終行まで引用しよう。

《おいおい　あの顔いろは少し青かつたよ》
だまつてゐろ
おれのいもうとの死顔が
まつ青だらうが黒からうが
きさまにどう斯う云はれるか
あいつはどこへ堕ちやうと
もう無上道に属してゐる
力にみちてそこを進むものは
どの空間にでも勇んでとびこんで行くのだ
ぢきもう東の鋼もひかる
ほんたうにけふの…きのふのひるまなら
おれたちはあの重い赤いポムプを…
《もひとつきかせてあげやう
ね　じつさいね
あのときの眼は白かつたよ
すぐ瞑りかねてゐたよ》
まだいつてゐるのか
もうぢきよるはあけるのに
すべてあるがごとくにあり
かゞやくごとくにかがやくもの
おまへの武器やあらゆるものは
おまへにくらくおそろしく
まことはたのしくあかるいのだ
《みんなむかしからのきやうだいなのだから
けつしてひとりをいのつてはいけない》

九

ああ　わたくしはけつしてさうしませんでした
あいつがなくなつてからあとのよるひる
わたくしはただの一どたりと
あいつだけがいいとこに行けばいいと
さういのりはしなかつたとおもひます

この長篇は生と死の中間の状態、あの死んでも生きているという独特の位相を仮構するひつようがどうしてもあった。この状態においてはじめてふたりの心が通いあった。その仮構にあらがう声が内心にはやはりあるのだ。だから〈わたくし〉はそれを、けんめいにうちけす、だまっていろ、おまえにどうこういわれる筋合はない、と。「あいつはどこへ堕ちやうと／もう無上道に属してゐる／力にみちてそこを進むものは／どの空間にでも勇んでとびこんで行くのだ」――そう〈わたくし〉はおのれに向っていいきかす。妹を死なせてやることができたいま、幻想のなかで天に、地獄に、妹をさがしても妹は見つからない。これから〈わたくし〉がどう生きるか、その生き方のなかでしか妹とは出会えない、そのことがわかってきたからだろう。

しかし声はしつようにくりかえされる。《もひとつきかせてあげやう／ね　じつさいね／あのときの眼は白かつたよ／すぐ瞑りかねてゐたよ》――強引に〈わたくし〉は声を封じようとする。

「まだいつてゐるのか」以下「おまへの武器やあらゆるものは／おまへにくらくおそろしく／まことはたのしくあかるいのだ」まで、ここはねじふせようとする意志が強すぎるあまり、いまだ表現はリズムの内側にすべてひきずりこまれてしまい、意味（概念／イメージ）としてうかびあがれない、といったありさまだ。いったいなにをいいたいのか？「おまへの武器」の「おまへ」とはだれか？　声に向っていっているのか？　それとも、そうした声をひそめている自分自身なのか？「武器」とはなんだろう？　少しまえに「がいねん化」することを「自衛作用」とよんでいた。「武器」とは、では自衛することばだろうか。喪失を感じとるあまり「きちがひ」にならぬため、天上行や地獄行のいろいろな幻想をえがきだすことばの力だろうか？　そしてかりにその「武器」をつかってえがきだしたものが、どれほど「くらくおそろしく」とも、「力にみちて……勇んでとびこんで行く」ものには、もうそれだけで「たのしくあかるい」空間ひらけてくるということか？

ざんねんながら、よくわからない。内心のもうひとつの声を封じようとする意志だけがつたわってくる。〈わたくし〉はまだまだゆさぶられている。そのゆれから逃れるように、さいごの一節がやってくる。

《みんなむかしからのきやうだいなのだから／けつしてひとりをいのつてはいけない》というもうひとつ別の声ではじまり、とうとつにやってくる、弁明めいたこの一節もまたわかりにくい。恩田逸夫はここに肉親愛と宗教心との矛盾かっとうを見ている（『宮沢賢治挽歌の中心課題とその展開』）。ことばどおりにうけとれば、この見方はまちがいではない。しかしはたしてそうだろうか？

宮沢賢治が妹に深く愛情をよせていたことはいうまでもない。しかしこれほどしつように妹の行く末に関心をよせさせたものは、じつは彼の罪障感なのだ。この屈折を見てとらないことには、そもそもなぜこの長篇が書かれねばならなかったか、そのわけがわからなくなる。ここで〈わたくし〉はともかくも、おのれの固執と不安とを解こうとした。それはつまりは妹を逝かせることであった。なぜなら〈わたくし〉は生きのこるのを、さしあたってはえらんだのだから。

一〇

また宗教心についていえば、さいごの一節で〈わたくし〉は「万人の幸福」を祈ろうとしていると恩田はいうが、そのとらえ方は宮沢賢治の主観的な意図でもある。問題は、したがって、その意図をどううけとめるかにある。

《みんなむかしからのきやうだいなのだから
けつしてひとりをいのつてはいけない》

――宗教心からやってくるこの要請は、わたしにはあまりに抽象的であるように思う。いまの文脈では、妹ひとりのことばかりにこだわるな、ほかにももっと考えるべきこともあろう、という意味にとれる。しかしこの要請をそれ自体として見たら、どうだろう？　だれとも具体的な関係を結ばず、みんなのためにただ祈るべし、ということになるのではないか？　ここには宮沢賢治にあってくりかえしあらわれる、関係性への拒絶の意志がうかがわれるのだ。

宮沢賢治はここで本気で、妹ひとりのために祈ってはならない、みんなのために祈らなくては、と思ったか？――

もういちど、詩に帰ってみよう。

意地悪い声は、〈わたくし〉の仮構をついてきた。この仮構性の根源は、生きのころうとする意志である。だとすれば意地悪い声はこの意志をうけいれがたいのだ。どうしても妹の死と和解せず、自分が生きのびてしまうのを承服しない心があるのだ。このゆれをのりこえようと〈わたくし〉はこう思う。ゆれは妹にばかり執心するところからくる、と。そして〈わたくし〉はその執心に対置させて、みんなの幸福への祈りをおき、妹への執心をのりこえようとする。――しかし、これは問題のすりかえである。

問題はどこにあるか？　宮沢賢治はなぜ妹に執心せざるをえないか、その根源をえぐりだすべきなのだ。なぜ妹に執心するか？　そこに無垢願望がかけられていたからだ。無垢とはなにか？　それは妹の食の円環から見たとき、彼のとらわれている円環を悪しき食の円環として現出させるものであり、また妹と彼との関係から見たとき、彼と「ほかのひと」との関係を性の魅惑とおびえという、対象を喪失した情動のアンビヴァレンツとしてあらわすものだった。この無垢は関係を回避したところにかろうじてなりたつ。具体的に関係を結ぼうとすれば挫折は必至なのだ。

妹を完全に失ったいま、宮沢賢治は岐路にたっている。だがそれは恩田のいうように、肉親愛か宗教心かというものではない。一方の道は、妹の死とともに無垢願望の終焉を見とどけ、きびすをかえし、生活へと、関係性へと帰って行くことである。他の生きものの体をくらい、性をなかだちにして他人との関係のなかにはいって行くことである。だがこれは、すでに骨がらみ法華経の信仰にとらわれていた宮沢賢治には、ただただたんなる可能性として指摘できるだけのことかもしれない。

いま一方の道はどこに通じているだろう。みんなのために祈るべし、という要請をぎりぎりのとこまでひっぱって行ったら、それは結局はあらゆる具体的な関係をしりぞけることになるのではあるまいか、という危惧についてはすでに記した。ここに臨終詩篇としては書かれなかったが、可能性としては考えられた、あの四番目のふるまい方が関連をもってくる。それは妹のために、おのれの存在を否定することであった。だれとも具体的な関係を結ばず、しかもみんなの幸せとなる

生き方はなにか？　祈りよりもっと直接的で、関係の拒否がそのままみんなへの奉仕となる道はなにか？　この要請をもっとも貧しくたどって行った突端には、グスコーブドリの〈犠牲の死〉がたっているだろう。

ここでは、まだそこまで行っていない。宮沢賢治はともかくも、妹はどこをさがしてももういないことに気づいた。そして妹に出会える生き方はどのようなものか、問いはじめているのである。

さいごの詩群『風景とオルゴール』についていうべきことは多くない。恩田逸夫はここに、詩の技法の進展、自然受容にたいするよゆう、社会的意識のあらわれ、等々、ようするに宮沢賢治の成熟を見ようとしている（『詩章「風景とオルゴール」の性格』）。詩の鑑賞としては、これはまちがいではない。しかし鑑賞が正確で行きとどけばとどくほど、詩の本質をはずすことだってあるのだ。ここでひつようなのは鑑賞ではない。むしろ注釈である。

この詩群の本質をひとくちでいえば、それはさいしょの詩群『春と修羅』の照りかえしである。生活へ、関係へともどって行くか、みんなの幸せをもたらす自己否定へとすすみ行くか、幅としてとらえればこれだけのひろがりをもった可能性の選択をまえに、いまだ決着がつかぬままインスピレーションだけはよみがえったのである。

下では水がごうごう流れて行き
薄明穹の爽かな銀と苹果とを
黒白鳥のむな毛の塊が奔り
（ああ　お月さまが出てゐます）

ほんたうに鋭い秋の粉や
玻璃末の雲の稜に磨かれて
紫磨銀彩の尖つて光る六日の月
橋のらんかんには雨粒がまだいつぱいついてゐる
なんといふこのなつかしさの湧きあがり
（『風景とオルゴール』）

なにをなつかしがっているのか？　おそらくそれは詩群『春と修羅』のつぎのような詩篇である。

カーバイト倉庫

まちなみのなつかしい灯とおもつて
いそいでわたくしは雪と蛇紋岩との
山峡をでてきましたのに
これはカーバイト倉庫の軒
すきとほつてつめたい電燈です
（薄明どきのみぞれにぬれたのだから
巻烟草に一本火をつけるがいい）
これらなつかしさの擦過は
寒さからだけ来たのでなく
またさびしいためからだけでもない

さいごの詩群はさいしょの詩群を想いだしているのである。つぎの一節はスケッチ集冒頭の詩『屈折率』をはんすうしている。

一二

こんなにもそらがくもつて来て
山もたいへん尖つて青くくらくなり
豆畑だつてほんたうにかなしいのに
わづかにその山稜と雲との間には
あやしい光の微塵にみちた
幻惑の天がのぞき
またそのなかにはかがやきまばゆい積雲の一列が
こころも遠くならんでゐる
これら葬送行進曲の層雲の底
鳥もわたらない清澄な空間を
わたくしはたつたひとり
つぎからつぎと冷たいあやしい幻想を抱きながら
一挺のかなづちを持つて
南の方へ石灰岩のいい層を
さがしに行かなければなりません

（『雲とはんのき』）

この詩群は本質的に自家引用である。そしてこの性格は『春と修羅第二集』におさめられた多くの詩篇にも共通する。もしこれらの詩をすくう読み方があるとすれば、それはてっていして自己パロディーとして、つまり〈お道化うた〉として読むしかない。『春と修羅　第二集』の序詩はその可能性を示していたはずだった。

そこでたゞいまこのぼろぼろに戻つて見れば
いさゝか湯漬けのオペラ役者の気もしまするが
またなかなかになつかしいので
まづは友人藤原嘉藤治
菊地武雄などの勧めるまゝに
この一巻をもいちどみなさまのお目通りまで捧げます

しかし宮沢賢治はついにそのことを自覚しきれなかったと思う。ここに中原中也がうたいだす必然があるのだ。

春日狂想

愛するものが死んだ時には、
自殺しなけあなりません。

愛するものが死んだ時には、
それより他に、方法がない。

けれどもそれでも、業（？）が深くて、
なほもながらふこともなったら、

奉仕の氣持に、なることなんです。
奉仕の氣持に、なることなんです。……

（了）

一三

［テキスト］

校本　宮澤賢治全集　全十四巻　筑摩書房（昭和四十八―五十二年）

［参考文献］

天澤退二郎『宮澤賢治の彼方へ』　思潮社（初版一九六八年／増補改訂版一九七七年）

梅原猛『地獄の思想』　中公新書（一九六七年）

恩田逸夫『宮沢賢治論』全三巻　東京書籍（一九八一年）

菅谷規矩雄『宮沢賢治序説』　大和書房（一九八〇年）

高村光太郎全集　第三巻　筑摩書房（昭和三十三年）

中原中也詩集　角川文庫（昭和三十年）

中村稔『宮沢賢治』　筑摩書房（一九七二年）

中村稔編注『宮沢賢治』　中公文庫　日本の詩歌十八（昭和五十四年）

福島章『宮澤賢治』　講談社学術文庫（昭和六十年）

堀尾青史『年譜　宮澤賢治伝』　中公文庫（一九九一年）

見田宗介『宮沢賢治』　岩波書店（一九八四年）

村瀬学『「銀河鉄道の夜」とは何か』　大和書房（一九八九年）

村瀬学『「いのち」論のはじまり』　ＪＩＣＣ出版局（一九九一年）

吉本隆明『宮沢賢治』　筑摩書房（一九八九年）